

## 東日本大震災の地へ その2

夏になった。再び東北へ出かけることにした。この間、テレビを通して見て来たのは、瓦礫を取り除いた荒野のような被災地の姿だった。一方、福島原発では循環冷却を目指すものの、これが完全に実現できないまま、危険を取り去れない状況が続いていた。

### 東北自動車道を北へ

5月の東北行きでは、わずか一日のボランティア活動だった。何かやり残したような中途半端な思いが残っていた。そこで今回も遠野を目指すことにした。前回と違う点は、現地での買い物などに便利なよう自家用車を使い往復することだった。現地でただ汗を流すだけでなく岩手県内の百名山である早池峰(はやちね)山か岩手山のいずれかに登る楽しみを後半にとっておくためにも、車を利用することにした。震災支援の扱いを受ける車は、高速道路が無料であることを知っていた。そこで「遠野まごころネット」から要請書のFAXを送ってもらい、それを携えて地元の市役所に往路のみ申請に行き、出発当日に許可証を手に入れた。8月2日(火)の午前だった。

その日は夕方までに遠野に着けばよいので、午前9時半過ぎの出発となった。10時半頃に外環道の大泉インターに入り、間もなく川口ジャンクションから東北道へと進んだ。東京では晴れ間も見えたが、道中、大体が曇りで、厚さを感じずに走ることができた。昼は福島県の二本松市の手前、安達太良(あだたら)サービスエリアでとったが、西方に見えるはずの安達太良山も、この日は見えずじまいだった。

午後4時頃には、岩手県の花巻に達し、そこから東へと延びる釜石道路へと入る。間も



地図1 大槌と鶴住居 根浜は中央から箱崎より

なくその終点、東和インターを出ることになった。ここから北上山地に囲まれた盆地の街「遠野」へは、1時間の道のりだった。天気は回復してきており、これからは被災地での暑さ対策がいるだろうと思われた。

「遠野まごころネット」のVCである市の総合福祉センターは、夏休みに入ったせいかこの日も大勢の人たちが集い、丁度沿岸でのボランティアから帰って来た人たちの出入りもあり、ごった返していた。受付で登録を済ませた後、国道沿いのラーメン屋で夕食とし、前回同様、VC近くの大型スーパーで食料を買い、例のシャワーボックスで体をさっぱりさせて明日に備えた。

### 第一日目 大槌町

8月3日朝7時半、ラジオ体操後の朝礼で、大槌に行く列に並んだ。5月に出かけた大槌のその後が気になっていた。そのままマイクロバスに乗り込んだ。バスは前回と異なり、峠道を通らず、国道283号線でトンネルを抜

け、釜石の街へと下っていく。途中、釜石市内のコンビニに寄る休憩と港近くの公園に設けられた仮設トイレでの休憩を入れながら、今度は沿岸部の国道 45 号を北上、前回とほぼ同じ 1 時間で大槌の町へと入った。

街の中心部の手前、これも前回と同じ旧大槌保育園の園庭で下車し、作業班の割り振りに入った所で、なかなか軽トラックの運転手の助手が決まらない。そこで志願して一日軽トラに乗ることになった。前回とは違って一か所の現場ではなく、被災した大槌の街を回るようになった。

運転手の青年、熊谷君は、震災後一貫して沿岸部の被災地を支援してきた遠野市の職員で、組織から派遣された立場で仕事をしている。月一でその番が回ってくるのだそうだ。所属は広報課。おかげで震災後の遠野市の取り組みを知るには、恰好の相棒だった。

それにしても大槌の荒廃は驚くべきものだ。瓦礫を撤去した後に残るのはコンクリートの建物のみで、戦災後しばらくたった頃の東京はこんなだったのかと想像させた。ダンプカーが行きかう砂埃の立つ道路には、時々散水車が回って来て、路面に湿り気を与えていた。軽トラは大槌の街の三か所を結んで走り続けた。最初に向かったのは、残土やごみをそこに捨ててくれと言われた港の瓦礫置き場。二つ目が小槌川南岸で河川敷の清掃を任されている現場。そして三つ目が小槌川の北岸、桜木町の住宅街の一角。ヘドロを取り除き除草を行っている家の庭先だった。

途中、荒野の市街地跡に残る建物を熊谷君が解説してくれる。市中の図書館はレンガ造りのシックな建物だったが、2 階建てでそこまで浸水。貴重な文献資料が失われた。その後、遠野市からも応援が入って、残った資料の天日干しや新たなデータベース化に取り組んでいる。



写真 1 被災した大槌町役場

そして町役場。こちらも 2 階建ての低層だ。県道から少し奥だが、今は周りの建物の片付けが終わり、道路から見通せる。地震の直後、町役場の人々は津波が防潮堤を襲ってくるとは思わず、打ち続く余震から身を守るため、一たんこの役場前に降りたと言う。その後、「防災対策本部」を立ち上げるため 2 階の会議室へ向かう所で、津波の到来に気づき、急いで屋上へと避難しようとした。副町長は階段を登りきり、後を追った町長の加藤宏暉氏は一歩及ばず、2 階まで襲ってきた津波の濁流にさらわれた。その後、町長は行方不明になり、十日後に役場から北に 600m も離れたドラッグストアの前で遺体となり発見された。

瓦礫の捨て場は、港の岸壁に近いコンクリート舗装の広場だった。ダンプカーがひっきりなしに出入りし、うず高く瓦礫を積み上げていた。それを瓦礫の中腹に陣取るショベルカーがさらに頂を高くしようと上げていく。ちょっとしたゴミの山が、連なる形で出現していた。ダンプが列をなすところを少し外れて軽トラ用の処分場があり、そこを確認して引き上げた。脇に分厚いコンクリート壁がはがれ、傾いていた。熊谷君が港を守っていた防潮堤ですと言う。そう言われるまで気づかぬほど、原形を留めていない。津波のすさまじさを思ったものである。

次に向かったのは、ボランティアが活動している現場。前回の5月、自身も活動した小槌川沿いの二か所だった。河川敷には香港からの団体が入っていた。現場を知る班長が指導して、時には川の流れにも入り、そこのごみを拾い集めていた。これを土のう袋に詰め、トラックの荷台に運ぶ。そういう時だけこちらにも体を動かすが、後は運転手の熊谷君のナビ役に徹した。三番目が、家族連れのボランティアが庭のヘドロと除草を請け負う現場だった。草取りなど今もそこに住む住民ができそうなものだが、依頼の仔細はわからないので、ここで土のう袋を引き取って軽トラに載せ、先の瓦礫の捨て場へと向かう。これを一日繰り返した。途中、港近くで警察官による捜索活動に出会った。「死体が出たのでは」と、熊谷君が話してくれた。

## 遠野市の被災地支援

熊谷君は、地震直後のことも話してくれた。震災当日、遠野市で唯一大きな被害が出たのが、皮肉にも市役所本体だったという。職員はその対応に追われたこともあり、沿岸部の被害を知らず、深夜になってあの峠道を越えて大槌の人が助けを求めに来たことで、ようやくその被害の凄さを知ることになった。遠野市の本田敏明市長は岩手県庁の防災課出身で、日頃から沿岸部での津波被害の際は遠野市が救援拠点になるべきだと唱えていた。それを実践する時が来た。

市は救援センターとして全国からの物資を集積・分類・配布する一方、各都道府県からの応援職員、自衛隊、警察、医療従事者、消防署員などが来援し、沿岸部へ出かける拠点となった。自衛隊は「まごころネット」前のグラウンドにテントを張った。熊谷君も「デパート」と呼ばれた物資センターで、休日返上の仕事が続いた。さらに4月末には全壊し

た市役所から駅前のビルへの移転など、普段の何倍もの仕事に追われることになった。そう、大変な日々を振り返った。



写真2 地震直後の根浜海岸 夏にでかけたのは左奥

## 第二日目 釜石市根浜海岸

8月4日、朝。この日は釜石市の根浜海岸での奉仕に参加した。釜石と言っても前回そこを通った鶴住居海岸の先で、大槌の街と海を挟んで南側になる位置だった。前日と同様、釜石の市街地まで来てそこを北上する。途中両石(りょういし)の集落跡を通る。頑丈な防潮堤が一部壊れたままだが、地震当日ここから津波が家々を襲い、ここもまともに立っている家がほとんどない。道が上り坂になり集落を抜けるところに、明治三陸の大津波の碑が立っていて、「津波はここまで来た」と示していた。しかし、今回の津波はそのさらに上方まで及んでいた。

根浜の集落へ向かう道には、宝来館という旅館が海に臨んで建っていた。もとよりここにも津波が押し寄せ、宿の女将が津波をかぶったものの九死に一生を得るという体験をしたことで話題になった。しかし、2階以上被害は軽く、そこは今も根浜で唯一の避難所となっていた。

この日、根浜に派遣された班は二十名近く、先月から遠野に来ている日系アメリカ人で学生の大辺(おおべ)君をリーダーに、JICAでア



フリカに派遣予定の女医若松さん、大辺君とは別にアメリカからやって来たメンバーも含むキリスト教の CRASH という団体のメンバーなど多彩だった。根浜は小さな入り江で、夏は海水浴場として賑わうところだった。しかし今は、そこに建物一つ残っていない。すべてが津波に洗われた。ボランティアへの依頼内容は、お盆を前に先祖の墓地がある奥の山へと続く道を清掃すること。土台だけが残る民家の周囲での、ゴミ拾いと清掃などの作業だった。

一輪車(通称ネコ)が役に立った。ゴミだけでなく残土もこれに載せ、坂下の残土集積所とを往復した。この日は本格的な暑さが戻って来た日で、午後になると砂地が乾き砂ぼこりが立った。汗もかいたが、海からの涼風に助けられた。民宿を経営していたのか、玄関前に大きくコンクリートが打たれた建物の周囲で、津波が運んだ土砂を取り除いた。

途中、こまめに休憩を入れる。持参のペットボトルはすぐに底をついた。大辺君が CRASH のメンバーと話をかわす。我々以外、人のいない東北の漁村で、ロサンゼルス仕込みの英語が飛び交うのが、やや奇異に思えた。家の瓦礫の中には、そのまま洗えば使えるような皿やカップも多くあった。そうした人が生活していた気配を感じると、被害に遭った人が直面する生活再建の多難さを思わずにはいられなかった。

### 第三日目 陸前高田

8月5日、朝。最後の被災地訪問として、あの陸前高田を選んだ。遠野からの派遣先としては一番遠く、バスで1時間半の距離だった。ここまで書いてきて気づいた方も多と思うが、遠野に集うボランティアには5月以上に多くの海外からの参加者がいた。VCにいる時、キュートな白人女性が一人動き回っ

ているのが目についた。この日はそのジュリさんが一緒だった。

こうした外国人勢と同じくらい大きい団体が、夏休みを利用した大学生とその大学から派遣された教職員だった。獨協大学、東京大学、法政大学が、数十人規模で参加していた。彼らは揃いのビブス(ゼッケン)をつけ、目立つ存在だった。この日は法政大学が東京から彼らに乗せて来た大型バスをそのまま使い、我々と同じ陸前高田に向かった。



写真3 陸前高田での法政大生

荒廃した陸前高田の市街地を抜けて向かったのは、上長部(かみおさべ)という海から離れた谷間だった。ここには瓦礫だけでなく、水産加工会社カワムラの倉庫から流れ出た冷凍さんまの死骸などが散乱していた。この地へ前回も入ったという今回の班長、橋野君の話だと、5月の上長部はさんまの死骸の腐臭が強く、その片付けに四苦八苦する状況だったという。その頃と比べると片づけはかなり進行していて、この日の作業の困難さは現場の後片付けより、回復してきた天気のために暑さが増し、すぐに体が汗まみれになったことだった。

昼は乗って来たバスが待つ場所まで戻り、冷房を効かした車内で弁当を広げた。近くの現場を担当していた法政大生も、同様になっていた。同じバスで、この日もアメリカからの団体が入っていた。そしてジュリさんのよう

な個人もいた。栃木県の高校で英語を教える川口先生とジュリさん、そして私の三人で四方山話をした。ジュリさんは何とヨーロッパの小国デンマークからの参加だという。コペンハーゲンの大学生で、日本とその文化に元々興味をもっていたと言う。そこに今回の大震災。未だ見たこともないこの日本が、急に身近なものに感じられたという。夏休みを利用しての来日だった。こちらは、日本で童話作家のアンデルセンが知られていることなど、多分ジュリさんが知らないことを話した。

この日は暑さのせいもあって、午後2時台の終わりには片付けに入った。地元町内会からはペットボトルの差し入れがあった。それからまた1時間半かけて、遠野へと帰還した。来て四日目が終わり、体育館での雑魚寝(ごこね)はかなり厳しかった。この日はVCを後に市内北部の水交園という公共の宿をとっていた。そこでようやく骨休めが出来た。翌日再度のボランティア活動を予定していたが、実際には体が言うことをきかず、遠野を後にすることにした・・・。

